

〔修士論文要旨〕

近江君の存在

青木 美奈子

近江君という姫君は『源氏物語』の登場人物の中でも一際異彩を放つ人物である。内大臣の外腹の娘であるが、田舎で生まれ育ったため、彼女の振る舞いや言動は上流貴族のそれとは明らかに違うものであった。内大臣邸に引き取られたものの、下層の暮らしから上層の世界へと入り込んだ彼女は、その違和感から周囲の嘲笑を浴びるようになる。彼女の特徴は早口で余計なことまで喋り、独特の言葉遣いをする。純粹で素直な性格であり、思ったことは迷わず口にして、感情も包まず面に表す。貴族の姫君らしからぬ様子が次第に世間の人々の知るところとなり、この評判の悪さが父内大臣にも及ぶ事となる。

序章ではまず近江君に関する研究史をまとめ、テーマ別に分類した結果、6つのタイプに分けられた。

- 1、親同士の対立
- 2、「近江」という地名
- 3、「大御大盃とり」
- 4、呪性・聖性・神性
- 5、物語の作中人物との比較

6、近江君の言語

それぞれ内容を挙げ、重要な指摘などを抜粋し、まとめた。諸論文には『源氏物語』本文に即した考察の不足が見られたため、次項においてその問題点を、第一章からは本文に忠実に、近江君という人物を探っていった。また研究史をひもとく事によって、近江君と双六の關係性、近江君の発言についての考察は現在まで十分に成されていないことが判明し、これを解消すべく、第三章「近江君と双六」、第四章「失笑をかう言動」とした。

第一章では近江君はどういう人物かということを確認することを目的とした。

- 一、容姿・様子の描写
 - 1、「あいぎょうづく」
 - 2、「さがなし」
- 3、表情
 - 二、舌疾さ

このように項分けし、近江君の描写の中から、容姿・様子と舌疾さについて取り上げ、目だった言葉の「あいぎょうづく」「さがなし」を、そして彼女が見せる表情に着目した。彼女の容姿には笑われる点が無く、愛嬌があつて親しみやすいのであるが、表情の描写となると怒ったり泣いたりとかなり表情豊かなことが分かり、近江君は生まれつきの舌疾さと共に、笑われる要因としてこれらを備えていることが分かった。しかし、近江君の欠点が描かれた前後に必ずと言って良いほど入っているのがフォローの言葉で、彼女には憎めない人間性というものも備わっているのであった。

第二章は近江君の異質さについて、次の二つのことを見ていった。

一、他に用例を見ない言葉・珍しい言葉

二、近江君の歌

これらは近江君と周りの人々とを比べたときの近江君の異質さを際立たせることに作用していた。またここで異質とした漢語・歌枕の多用から、彼女の真意を考えることも行った。

第三章では、近江君と双六を、次のように二つに分け、

一、双六とは

二、物語の中の双六

この当時の双六について解説したのち、「源氏物語」や同時期に見られる物語の中の双六を見ていった。そしてそれから分かった双六の性格は近江君に重ね合わせる事が可能であったため、この「近江君と双六」という組み合わせについての謎を解くことが出来た。

第四章には近江君の失笑をかう言動を、

一、姫君に似つかわしくない事をしようとする事

二、威光に頼ること

三、はつきりものを言うこと—1、はつきり言う様子 2、はつきりと言ったこと

このように分け、そして、心理描写の無い彼女の心内を、その発言内容から探るということをした。その結果、姫君に似つかわしくない仕事をしようと言い出すことは、普通の姫君では出来ないようなことが私には出来るという健気さのアピール、威光に頼ることは、頼りのない身を守るためであり、そしてこれらの事をはつきりと言うことでより相手・特に父内大臣に理解してもらおうとするなどと、それぞれ、発言の内には何らかの意図が感じられた。近江君の遠慮ない発言一つ一つには、彼女なりに貴族社会で何とか生きようとする必死さが垣間見えるのである。これには彼女の後ろ楯などが全く登場せず、母は既に亡くなり義父の存在も見えないといった貴族社会ではあまりにも立場の弱い彼女の境遇によって裏づけされていると言える。